

3 かおるちゃんくえすと

公園の隅の階段に向かって走って行った。

ピーポー　　つてふたつの音の繰り返し。ドーナツ屋台にたどりついたわたしたちに残されたのは、こげこげの車とその音だけだった。

「ぶ、ブッキー、焦りすぎよあ　」

ひざとか背中とか、ぼんぼん叩いてくるミキちゃんの手を感じ。階段の途中で何度も転んじやつたら、きつと土とか砂とかあつちこつちついてるんだろうな。

でもそんなこと、わたしの頭のまんなかにはなかった。

「早すぎる　わ」

口から出てきた言葉に、自分ではつとしちゃった。顔上げた目の前のラブちゃんたちが、目をまんまるにしてるくらい。

「ちよ、ちよっとどうしたの、ブッキー!？」

びっくり顔のふたりを見て、わたしの頭が少しづつ冷めてきた。そう、どう考えても早すぎるわ。爆発が起きてから、救急車が出ていくまで何分もかかってない。これじゃまるで

「まるで、救急車が爆発を待ってたみたい　」

「ええっ!?!」

ふたつの声が重なって響いてきたのが、とつても遠くからに思えた。

「ど、ど、ど、どうしよう、ミキたん!？」

「落ち着きなさい、ラブ。慌あわてたって、なにも変わらないでしょう?。」

そう、落ち着け。落ち着くのよ、祈里。

ふたりの声を聞きながら、わたしは自分に言い聞かせた。

かおるちゃんがやることには、きつとなにか意味があるわ。ただ、すぐにわからないだけ。考えなくちゃ！

わたしは大きく深呼吸してから、周りを見回した。目に入るのはラブちゃんとミキちゃん、大きな公園につながる階段、焦げちゃったドーナツ屋台のバン、その後ろに道路　あら？

「車？」

灰色っぽい車が、ちよつと離れた道路の脇に停まっている。もちろん、それくらい大したことないんだけど　わたしはそれが妙に気にかかった。

「駐車場なら、もつと公園に近いところにちゃんとあるのに　あつ」

チャリン、って音といっしょに、指の先に冷たい感覚があった。無意識に、手をポケットに入れてたんだわ。

「ブッキー？　なにやってるの？」

ラブちゃんの声が、遠くに聞こえる。

けど、わたしはそれどころじゃなかった。

だって、ポケットから取り出したもの、それは、

「ゆないてつど、ねいしょん　」

「国連のマークのバッジ？　ブッキー、そんな趣味あつたの？」

ミキちゃんの声で、はつとした。そうだった。かおるちゃん、言ってたっけ。わたしたちを守るために、知らない間にわたしたちを、すごい立場にしちゃったんだ、って。このバッジは、その証拠　ちよつと、待って。

わたしは、さっきの車をまた見てみた。少し遠いけど、中に人がいるのがわかる。メガネみたいなものが、こつちを向いてるわ。もちろん、爆発したドーナツ屋台を見てるのかもしいないけど　だけど。「ふたりとも、ここで待ってて。わたし、行って確かめてくる！」

「え!?　ちよ、ちよつとブッキ　うわわっ!!」

5 かおるちゃんくえすと

車の方に走って行こうとしたわたしの背中に、ラブちゃんのびっくり声が響いた。な、なに？

そう思つて振り返つた先から、女の子の声でした。

「ラブーっ！ あ、の、ばかは、どこおーっ!!」

赤いドレス姿の女の子——せつなちゃんが、スカートの上を蹴り上げながら、わたしたちの方に走ってきてた。

「あの、ばかは どころ行つたのっ!!」

焦げた車の前、わたしたちの目の前まで走ってきたせつなちゃんは、息が切れるのも構わずにそう叫んだ。

すっごい剣幕。荒い息で目尻に涙ためて はじ

めて見るわ、こんな顔。

「ばかつて ラビリンスじゃないの、ウェスターは？」

「そのばかならもうぶん殴つてやったわ！ そっちじゃなくて、日本のばかよ!!」

え？

一瞬、わたしたちは顔を見合わせた。これって、ひよっとして。

「日本の、ばか って、かおるちゃん？」

ラブちゃんがおそろおそろ言ったら、せつなちゃん、その両肩つかんで、

「他に誰がいるっていうの!?! それよ、そのばか! どこ?」

はじめて見る怖い顔。でも、戦つてた時の怖い顔と違うわ。これ

「そのばか——かおるちゃんなら、いま爆発しちゃつたけど」

「やつぱり!」

くちびるを噛んで、地面を睨みつけながら吐き捨てるみたいに言うせつなちゃんを見て、わたしは確信した。

爆発したの、知ってる　ううん、見たんだ、せつなちゃんは。

「せ、せつな!? なにか知ってるの!!!」

「私たち、何が起きたのかわからないのよ。車が爆発したと思ったら、いきなり救急車で運ばれて行ってしまったって。」

ラブちゃんとミキちゃんの声を遠くに聞きながら、わたしは、ちよつと前のこと思い出してた。

かおるちゃんに聞いたこと、ウエスターさんに聞いたこと、タルトが運んでた本のこと。

そっか、やっぱり

「せつなちゃん」

「なに、ブッキー!」

振り向いたせつなちゃん、わたしのことを思いっきり睨んでる。でも、わたしは怖くなかった。

「それで、ラビリンスは救われた?」

「え　?」

せつなちゃんの目が、まるくなった。やっぱりだ。

せつなちゃんは、ただ怒ってるんじゃない。

「答えて。ラビリンスは、救われたの?」

「知ってるのね、ブッキー。なにがあつたのか」
強い視線をまっすぐ見返しながら、わたしは首を横に振った。そう、なにがあつたのか、わたしは知らない。でも

「でもね、かおるちゃんやウエスターさんたちがラビリンスを　せつなちゃんを助けたがつてたのは知ってるの。だから」

「だから?」

わたしは、さっきの車の中をもう一度見た。中の人、まだじつとこつちの方を見て　違つ。わたしたちを見てるんだわ。もう、間違いない。

「だから、黙って一緒に来て、せつなちゃん!」

そのまま、わたしは走りはじめた。左手はせつなちゃんの手首を掴んで、右手にはバツジを握って。

そして向かう先は あの手!!

公園の周りを回るように走っていくと、だんだん車が大きく見えてきた。運転席にいる、メガネをかけたおじさんの顔まで、はっきりわかる。

「ブッキー!? ぶつかると!!」

わたしは左手を離してバッジを指先につまみ出すと、そのままの勢いで開いてる車の窓に腕をつきだしたの。

「かおるちゃんのところ、連れて行って!!」

息が切れる、脚も痛いし、バッジを突きつけられたおじさんは、むすっとした顔のまま。

間違いだったらどうしよう そんなことも頭に浮かぶよ。でも、負けない。負けちゃいけないんだ。

「連れてってっ!!」

かおるちゃんの、ために

『かおるちゃんに会って、なにをしますか。お嬢さん方?』

そうしたら、車の奥の方から声が聞こえてきて、一瞬わたしは答えられなかった。

なんだか、かおるちゃんを、もっと大人にしたような声

「決まってるわ。一発殴らなきゃ気がすまない!!」

いつの間にか隣に来てたせつなちゃんの声が、代わりに応えてくれて、わたしは我に返ったの。かおるちゃんを知ってる 間違ってる、ない!

『君もかな?』

わたしがこくと頷いたら、車の中でも影が頷いたの。

『わかりました 高畑』

「し、しかし大塚にさ」

え? いま、にさって?

『隊則第十二条第一項、復唱!!』

「はっ! 隊則第十二条第一項」有資格者による正当

な要請に対しては、それが国家の損失に繋がる、若しくは人命に関わる任務を阻害するものでない限り、優先的に応えなければならぬ！」

『よろしい。資格についてはそのバッジで十分。要請の正当性は、自分の責任において認める。』

——それにだ、高畑。あのかおるちゃんを、このお嬢さん方がとつちめて下さるんだぞ。これを見逃す手はないだろう？』

付け加えた声が、なんだか笑ってるみたいだな、って思ったら、運転席にいたおじさんが降りてきた。

スーツ姿で背筋をピンと伸ばして、

「ごうぞ、お乗りください」

車の後ろのドアを開きながらわたしたちにそう言ったのが、とっても自然に見えた。おじさんって言うっちゃったの、かわいそうだったかも。

「ブッキーー！」

せつなちゃんが先に車に乗ったとき声がして、振

り返ったら、ラブちゃんたちが走ってきた。その向こうに、かおるちゃんの車。あ、そっだ！

「ラブちゃん、車お願い！」

まっすぐラブちゃんの間を見て、わたしは言ったの。でも、ミキちゃんといっしょにぼかん、としてる。もう！

「6年前だよ、6年前！ラブちゃんにしかできないんだから。お願いねっ！」

そのままわたしは車に乗り込んだ。これでわからなかったら ううん。

「6年 あっ！」

ラブちゃんだもんね。わたし、信じてる♡

せつなとブッキーが乗った車が動き出すまで、あたしはそのまま立ってたんだ。

「ラブ、よかったの？」

ミキたんの声でちよつと考えてることから戻されただけど、うなずいてみせたら、

「それで、6年前って？」

あれ、忘れてるのかな？ カンペキミキたんにしては珍しいなあ。

「6年前って言ったなら、あたしたちが、はじめてかおるちゃんに出会ったときだよ。この公園でのすみっこで、木のかげに隠れるみたいに倒れてたの。忘れちゃった？」

「あ、ああ。そうね。もう6年か　って、そんなことはどうでもいいのよ。いまはブッキーとせつなでしょ？」

一歩あたしに近づいてきたミキたんにまたうなずいて、

「多分ブッキーは、かおるちゃんに会いに行ってるんだよ。あたしたちはその間に、あの車を元に戻さなきゃ」

公園のすみにとまってる、コゲた車を指さしてあ

たしが言ったら、

「車、って　中身も？」

ミキたんが目をまんまるくしちゃった。

「うん。中身も♡」

だからあたし、今度は思いっきりうなずいてみせたよ。そしたら、はあ、つてため息が聞こえてきてさ。「しょうがない子よ、ラブって」

あはは。そっかな。

かおるちゃんのドーナツカー。あの中身を作れるのは、この街でたった一人だけ。あの人の、おもちゃ箱みたいな趣味めいっぱい作ったものだもんね。もう、ロボットに変形したって驚かない、ってみんなで話したくらい。

「それじゃ、行こっか、毒田のおじいちゃんのこと」

思いっきり明るく声をかけたら、ずつと困った顔してたミキたんがちよつと笑顔になってる。うん。

「毒田じゃない。ドクと呼ぶんじゃない」

声を揃えて言ったあと、ふたりに顔見合せて笑っ

ちゃった。こんなときだけど、ね。

「ブッキー、車って？」

え？

動き出した車の中でせつなちゃんにそう訊かれた瞬間、わたしにはなんのこともわからなかった。

車って、いまわたしたちが乗り込んだばかりじゃ

あ、そっか。

「ラブちゃんに言った方の車ね。かおるちゃんの車のことだよ。かおるちゃんがこの街に来たとき、公園の奥に住んでる発明家さんが作ってくれたの。どんな機械を入れてもいいからってみんなで頼んだら喜んでつくってくれたわ」

6年前を思い出すな。ドーナツ作る機械までお手製で作ってるの、見てもわくわくしたものね。

「どんな 機械でも？」

あれ、せつなちゃん、考え込んでしまった？ あ

あ、そっか。

「そう。きつとせつなちゃんが考えてる機械も、その人が作ったんだよ」

わたしは、ちよつとだけぼかして答えてあげた。

今乗ってる車の人たちが、わたしたちのことをどこまで知ってるかわからないから あら？

周りが暗くなった。窓が黒くなって、運転席とわたしたちの間に壁ができたんだ と思つたら、頭の上であかりがついたわ。

『安全措施です。お二人がかおるちゃんの居場所を知つたり、その場所にお二人が行つたことがわかると、保安上問題がありますからね』

席の前にあつたスピーカーから声が聞こえてきた。

わたしは、こっくりうなずいて、

「構いません。わたしたちは、かおるちゃんに会えれば」

って言いかけて、ひとつだけ気になったの。さっ

き呼んでた名前、ヘンだったな、って。

「あの、大塚 にさ？」

にさって、『二佐』だよ。つまり

『ははは。このバカモノのせいで、聞かれてしまいましたか。その階級が有効なのは、別の仕事をしているときです。いまの自分は、『かおたい』の一隊員に過ぎません』

思わず隣のせつなちゃんと顔を見合わせて、首かしげちゃった。

「かお、たい？」

『はい。『かおるちゃん対策部隊日本支部』略して『かお隊』です。かおるちゃんに協力する人たち
まあ、そう考えてください』

えーと。日本、支部、かあ。話が大きすぎて、なんか、ぼかんとしちゃっつ。

「なぜ、協力するの？」

横から低い声が聞こえてきて、わたしは思わずせつなちゃんの顔を見た。両手を組んだ上にあごを乗っ

て、見えないはずの助手席をじつとにらんでる

『かおるちゃんは、ひたすら人を——子供を守るうとするんです。主義も宗教も人種も、地球に住んでいなくても関係なくね。だから、みんなが協力するんですよ』

スピーカーごしの、声の雰囲気が変わった。静かでゆっくり、まるで、かおるちゃんがたまに真面目に話すときの口調みたい。

『もちろん、人間ひとりで守れる相手は限られます。それでもひとりを守る範囲は守る。それが広がれば何千、何万の子供を守る。かおるちゃんは、それを世界中の怖い人達を相手に広めていった人なんです。でも』

でも？

『かおるちゃん自身は、守る子供を見つけれないでいました。あなた方の前には』

え ??

『あなた方が初めて変身したとき、いきなり自分に

連絡があつたんです。今でも覚えていますよ、聞いたことのないような厳しい声で『あの子たち、オレの管轄だから。手え出さないでよ』とね。それから色々な方面に手をまわして、忙しい毎日でした』話を聞いてて、いきなりふっ、と言葉がよみがえってきたわ。

——未来、作つてみる？ 背中なんか、オトナにまかせちゃつて、さ。ぐは

何年前　　そう、ラブちゃんたちと、将来の夢を話していたとき。かおるちゃんに言われた言葉。

「子供を、守る。か」
せつなちゃんの声でまた顔を見た。もっ、にらんでなんかいないけど、すっごく考え込んだ顔になつてる？

「それで、かおるちゃんは、なにをしたの？」
私が訊いてみたらせつなちゃん、しばらく走つてぼろぼろになつたスカート裾をいじつてから、目

をつむつてこう言ったの。

「かおるちゃんは、大魔王になつたのよ——」

「ねえラブ、ここつて公園よね？」

「そだよー」

ミキたんの声を聞きながら、あたしは木の間を歩いてただけど、

「なんだか、深い森みたいだわ」

「そだねー」

うーん、この木じゃないなあ

「ちよつとラブ！ なに上うわの空で聞いているのよ！」
おっと。いつけない。

「ごめんごめん、ミキたん。たしか、ドクのところには行き方があるんだつたな！、つて思つてたの」
「行き方？」

そっか。ミキたんは知らなかったっけ。

あたしとブッキーだけなんだよね。これ聞いてたの。

「3人そろえばすぐに来れるって言うってたけど。2人だと あ、思い出した。いない人の色に向かって進めばいいんだよ。いまはブッキーがいないから こっちだよ」

黄色のリボン巻かれた木の間に入ろうとしたら、ミキたんが、

「いない人の色？」

「そう。あたしがピンク、ミキたんが青、ブッキーが黄いろー」

答えながら歩いて行ったけど、

「それって」

「うん♡ だからさ、みんなで変身したときすっごく納得したんだ。きつと、あたしたちがもともと持っている色なんだなー、って。あつれえ？」

おっかしいなあ。いない人の色だから、黄色でいいはずだよな。でも森が途切れないう？

周りの木にも、もう黄色いリボン巻かれてるのはないし

「こっちよ」

「っとと！いきなり腕つかまれて引つ張らないだよ、ミキたん って、あれれれ？」

いつの間にか、目の前が広場になって、真ん中に2階建ての家——むかし見たまんまの、ドクの研究所が見えてる。

「ちよっ、ミキたん？なんでわかつたの??」

「いない人の色なら、黄色と赤、でしょ。ね、ドク」

うわ、さらっと言うなあ、ミキたん って、いまだくって言った？

「おお、青の嬢さん。相変わらず、カンベキじゃの。わからんかと思っておったが」

声が出てきた方を見たら、作務衣姿のちっちゃいおじいちゃん。6年前とぜんぜん変わってない毒田さん——ドクが立ってたよ。

「で、なんだね。文化祭の出し物でも借りに来たか

な？ 難しいんじゃないよあれは。ちから抑えてつからんといかんから」

「大丈夫よ、ドク」

「思いつきり作っていいものだから」

ドクの言葉に、あたしたち二人して同時に答えちゃった。

「ほお？ というと、かおるちゃんがらみじゃな」

そう言つて、ドクがくるつと背中向けた。指で、ついて来いって合図しながら、研究所の中に入つてくのを追つかけて、ミキさんとふたりで歩いて行くと、ドクがぼそつて一言。

「ふむ。かおるちゃんに最後に頼まれたのはあつちの世界とのゲートじゃから さしずめ、欲しいのはそのスペアかの」

あつちの世界 あ！

「ラビリン むぐ!?!」

あたしが言おうとした口が、ドクの伸ばしてきた手で塞がれちゃった。なんで？

「しーっ！ それはこつちの世界では禁句じゃと聞いとるぞ。どこに耳があるかわからんからの」

あ やつぱり。ドクつてラビリンスも、せつなのことかも知ってるんだ。

「それで、ゲートつて？」

「これじゃ」

話しながら開けた研究所の入り口の先、部屋の突き当りをドクが指さした。けど、それつて、

「オープン？」

「まあ、そう見えても仕方ないの。大きくすると電力を使いすぎて車に積めないんじゃないよ。さて、相手の電源が入つてないと使えんんじゃないが それ」

ドー見たつてオープンの温度つまみをドクが回したら、ヴウン って音がした。おお、それっぽい音だよ。

「おや？ 向こつとも動いてるよつじや 何か、こつ

ちに向かつてきてるの」

あれ？ ドクもちよつと驚いてるな。

ミキたんとかよつと顔見合わせた瞬間、オープンのフタがぱかっと開いて、そこからまぶしい光が漏れてきた。

「な、なに？」

「おい、その君たち、急ぐんじゃあー！早くこっちに来んと、ゲートが閉じてしまっぞあー！」

ゲートが閉じる？

よく見たら、ドクは漏れてきた光に向かって叫んでる。あたしも、なにが起きてるのかわからないまま、目をほそくして見てたら、いきなりオープンから光がふたつ、部屋にこぼれてきた。

「ちよつと、大丈夫？」

人　かな？ さっきドク、『君たち』って言うてたよね。うーん、スプラッタだったらイヤだなあ。

あ、だんだん光が弱くなって、形がわかるようになっていって　って、ええっ!?

思わずあたし、またミキたん顔見合わせちゃったよ。だって、これ

「う、ウエスター!!?」

「だい　まおう、って　せつなちゃん?」

車は動き続けているのに、私とブッキーのまわりだけ音が消えてしまったみたい。ブッキーの声もこわばってるし　だから、本当は言いたくなかったのよ。

「その日、私が目覚めたら、鎖で両手を柱に縛り付けられてたわ。塔の上で、お姫様みたいな服を着て。

そして、目の前には魔王の姿をしたかおるちゃん　がいたのよ　」

日本にかおるちゃんを追いかけて来て、私がひとりでぶん殴って　それですべて終わったことにしてもよかった。けれど、

「そこにかおるちゃんに聞いたわ。私が眠っている間になにをしたのかを。」

烟を毒で汚して、世界を黒い雲で包んで」

「ちよ、ちよつと待って？ かおるちゃんが、そんなこと おかしいわ!!」

ブッキーも知っていたのなら、聞いてもらわないといけない。

私は大きく息を吸って、あのなん時間かを頭の中に蘇らせた。

「そつよ おかしかったのよ。かおるちゃんが——」

「——よつ。おめざめだね」

「かおるちゃん!?!これ、なんなのこれ?」

最初に目に入ったのは、大きな黒いマントを羽織った、かおるちゃんだったわ。

動こうとすれば手首が縛られているし、周りを見れば変身したときみたいなドレスを着ているし。なにもかもがわからなかった。でも、それで終わりじゃ

なかったの。

「ちよつと我慢しててよ。痕あとは残らないはずだから」

「そうじゃなくって、これ え!?!」

目の前の窓がディスプレイに変わって、そこに映っていたのは、灰色の世界だったのよ。

つい最近まで耕していた地面も、魚を育てていた湖も、みんな白い 灰みたいなものに覆われて。

そして、人々が倒れていたわ。

「私 どれくらい意識を失っていたの?」

「そうだねえ、2日? いや、3日だっけな」

な !?!

「ああ、心配いららないよ。その間の世話は侍女さん

えてらさん、だっけ? 彼女がしてくれてさ。そんなときは席はずしてたからね、オレ」

んな!?!

言われてみれば、おしりあたりがゴワゴワしてる って!!

「かおるちゃんっ?!」

「おっと。ちよつとまってて、起きたことだし、すぐ放送するからねえ。」

放送？

なんのことかわからなくて、一瞬ぼかんとしてしまつた私の目の前で、かおるちゃんの雰囲気が変わつたわ。

「あー、ん、んんっ！ よおし。」

ふあっふあっふああつ！ 大魔王カオールのちからよおくわかつたであろうっ！

見よ！ 貴様らの希望たるプリキュアも、すでに我が手に墮ちた！」

ぎゅっ、と手首が引つ張られて、私は動けなくなつた。その姿が、目の前のディスプレイに大きく映しだされたの。

それと一緒に、塔の下から多くの声が聞こえてきた。すぐわかつたわ。この姿が、外にも映しださ

れてるんだって。

「何のつもり、かおるちゃん!」

私が睨みつけたら、かおるちゃんが手元でなにが操作して、

「とりあえずね。せつちゃん嬢ちゃんには、しばらく寝てもらつてたんだ。オレ、ここでは大魔王だから。その間に悪いことしてただけだ。」

「大魔王！ イースを離せっつ!!」

かおるちゃんの話が、ディスプレイからの大きな声にかき消されたわ。いまの ウェスター？

「お、戦士様のお出ましかあ。さて、大魔王としちゃあ迎え撃たなくちゃね。げはっ。」

なんで、そんなに楽しそうなの!?

「大丈夫だ、みんな！ 大魔王さえ倒せば、人々はよみがえる！ みんなで大魔王を倒すんだっ!!」

あれは サウラー!?! 仮装なんかして、いったい、なにがどうなつて

「よくぞ見破ったわ！ だが人間ごときに、この大魔王が倒せるかな？ そあれ！」

そう言つて、かおるちゃん——大魔王は、大きなマントを広げて、窓の外に飛び出したのよ。高い塔の上なのに。

なにをやつてるのつて思つたわ。そのときは、でもね。

「まあ、しばらく観てよ」

いきなり、背中から声が聞こえてきたの。

手首の鎖がゆるんだのを感じて振り向いてみたら、柱の後ろにスピーカーがあつたわ。

「その鎖もね、オレがこの世界から消えたらほどけるようになってるから。あとは サウラーくんの話とおりにしてくれりゃいいよ」

うわーっ、って声が聞こえて、塔の下をのぞき込んだら、またひとり、倒れていた。

「う、うえ ウェスター!? なに、なにこれ、なによこれはっ?!」

「大丈夫。大丈夫」

「なにが大丈夫よあつっ!!」

そばにいないつてわかつていても、叫ばずには居られなかつたわ。ディスプレイ越しでもわかつたの。息してないわ、ウェスターが、ウェスターがっ!! 「オレがいなくなれば、全部元に戻るよ。世界も、倒れてる人たちも。戻らないのはみんなの気持ちくらい」

その瞬間、スピーカーが壊れるくらい大きな音が出て、目の前にはオレンジ色が広がった さっきまでかおるちゃんを映していたディスプレイが、炎に包まれてたの。

「プリキュアさまに頼るんじゃない。我々が、我々の力で、この世界を守るんだ！」

また聞こえてきたのは、聞いたことのある声。顔を、姿を変えた、サウラーの声。

おお、つて応じる人たちを見て、私は確信した。なんて単純なひとたちだろう。だけど。

「みんなの気持ちだけ、変わったわ。たしかに——」

「——そして」

せつなちゃんが、考え考え話してくれたのが一段落したのを察して、わたしはあとをつなげたの。

「そして大魔王かおるちゃんは、逃げ込んだウエスターさんのドーナツ屋さんごと、爆発して消えちゃった。だよな？」

びつくりした顔が、こっちを向いた。

「ウエスターさんの車と、かおるちゃんの車はつながってたの。わたし、知っていたわ」

「こっちの世界に逃げるために、車まで用意してっ——」

わたしは、ひざにこぶしを叩きつけたせつなちゃんを真っ直ぐ見ながら、首を振った。

「違っよ。わかってるんだよね、せつなちゃん」

がっくり肩を落とした姿で、わたしにはわかった。せつなちゃんは理解してる。かおるちゃんが用意したのは、逃げるためじゃないってこと。

魔王が人間だった痕あとを残さないために、なんだ

「なんだか、わたしもぶんなくりたくなってきたわ。せつなちゃんと一緒に——」

「ん？ああ　ここは、カオルチャンの車じゃないのか」

オーブンから転がり出てきた人——ウエスターが起き上がって、周りを見回してるのを、あたしとミキたんはしばらくぼかーんと眺めてた。

だって、前に会ったときと同じなんだもん。違っのは大事そうに抱えてる大きなリュックサクと、ほっぺたに貼りつけた大きなガーゼだけ。

「派手にやられたもんね、ウエスター」

「ん、ベリーくん？ ピーチくんもか。久しぶりだな」
ミキさんの声が冷たくなつて、あたしもはつと
したよ。

「せつなにどれだけ酷いことしたわけ？」

そつだよ。ドレスぼろぼろになるのも構わない
で走ってくるなんて、普通じゃないもん。

「あー、ちよつとな。カオルチャン兄弟が大魔王
るんで、倒してくれつて頼まれたんだけど」

へ？

あたしは思わず、ミキさんと顔を見合わせた。ミ
キさんの頭の上に、ハテナが見えるくらいに　だ
いまおう??

「ああ、なるほどのお。かおるちゃんは、やつ
ちまつたのかい」

そつしたら、あたしたちの背中から、ぼそぼそつ
とした声が聞こえてきたの。ドク？

「ドク、なにか知ってるの？」

「ん　まあ、炊きつけたのはわしじゃからな」

炊きつけた？

「赤い嬢さんが神様扱いされておると聞いたでの。歴
史めくつてみい、つて言つたんじゃが」

歴史　つて？

また顔見合せてハテナマーク見えかけたあたし
たちに、ドクがぼそつと言つたんだ。

「人間が神様扱いされると、ろくなことがない——」
今まで聞いたことのない、低い声で。

ブッキーと一緒に黙つてしまつと、何の音も聞こ
えない。乗り物に乗っているなんて、信じられない
くらい。でも、考えことにはちようどいいかも

『とても失礼な言い方になります』

その静かな中に、スピーカーからの音が響いてきた。

『東せつなさん。あなたは人間と——地球人と区別がつきません』

「え？ え、ええ」

私は思わずうなずいてしまったわ。見えてもいないのに。

『ということは、あなた方には地球人と同じ弱さがあり、同じ状況では同じ歴史を辿る可能性が高い、ということですよ』

「だから、大魔王？」

『ええ。自分は現場を見ていませんが、想像はできません。あなたを　世界を救ったプリキユアを閉じ込めて、プリキユアより強い存在をアピールして、そして民衆に自分を倒させたのでしょうか？』

聞かれているのは構わないと思っていたけど、他人の口から繰り返し返されるのは抵抗があるものね。

そんなことを考えながら、私は一息をついて答えたわ。

「その、通り、よ」

『そのためだけの『大魔王』でしょう。多分、閉じ込められていても、不自由はしなかったのでは？』

「ええ、まあ」

つい、ため息まじりになるわ　ええ、不自由しなかったわよ。ヘンな世話まで、エテラにされてなれば、ね　気を失ったた時のことは、正直言つて聞きたくないもの。

『しかし、ひとつ不思議な点がありますな。魔王を民衆に倒させただけでは、プリキユアの立場は変わりません。君臨する女王さまが、守るべき女王様に変わるだけですよ』

「そのために、サウラーがいるのよ——」

（——あとでなら殴られてやるから、いまは笑っている。大魔王は、人々が倒した。これからは人々の時代だ。そうでないといけないんだ——）

「せつなちゃん？」

ブッキーの声で、私は我に返った。サウラーが乗っ

た計画は正しいのかも知れない。でも、

「でも、ひとつだけ許せないことがあるわ。ドーナツ屋に来ていた、小さな女の子を襲ったことだけは、ね」

「ええええええっ!!」

『ほっ、かおるちゃん』

二人の驚きかたに、私はちよつとだけ口元が緩むのを感じた。

「もちろん、眠らせただけよ。でも、あのかおるちゃんが、直接子供に手を上げたの」

『多分、子供を狙ったほうが、より民衆に衝撃を加えられる、と思つたのでしょ』 な

苦しそうなが、スピーカーから聞こえてきたわ。

それだけ、これがかおるちゃんらしくない、つてことを知つてるのね——

——子供が、目をさました。

たつたひとりドーナツの車の近くで倒れていた、5、6歳の女の子。大魔王に倒されてすぐ、人々が塔の影まで運んでいった子。人々が立ち上がる、きつかけになった子

私はすぐそばに寄つて、身体を起こしてあげたわ。

「大丈夫？ お名前、言える？」

「アナナス」

私に答えたと思つたら、すぐに目を見開いて、何かを探している 何かを？

「おじさんを、探してるの？」

私はふと、頭に浮かんでしまったのよ。子供が探す、探したいくらいの人。

「うん。ねむっちゃう前に、おいしいドーナツを食べさせてくれたおじちゃん。変な格好だけど、やさしいにおいだよね♡」

思わず、私はアナナスを抱きしめたわ。

塔の向こうには半分消し飛んだドーナツ屋の車。その中にはなにもなかった なにも！

「そう。そうよ。そうなのよ——」

「——その子 アナナスって名前の子は無事よ。今は侍女についてくれたエテラに預けてあるわ」
せつなちゃんが何度もため息つきながら言つのを、わたしは隣でじつと聞いてた。

でも、ちょっとだけ気になったの。いくら眠らせただけだって、爆発しちゃうようなところに置きっぱなしなんて。

「気にしてるだろうな、かおるちゃん」

「ブッキー？」

え？

いきなり、せつなちゃんがわたしの顔をまじまじ見つめてきた。なに？

「 いいの。なんでもないわ」

なんだろ、せつなちゃんの顔が、少しやさしくなっ

てるな。

呆れてるみたいにも見えるけど。

「——というわけで、カオルチャン兄弟は俺のドーナツカーごと爆発したらしいんだ」

ドクにうながされてはじめて、ウエスターの話に、あたしは頭がクラックラしてた。

隣のミキたんも同じみたい。おでこを手で押さえ、何度もため息ついちゃって。

だってさあ、こんなのどうすりゃいいってのよ。せつなが全力疾走でかおるちゃん殴りに来る気持ちはわかるけど、あのかおるちゃんだもん。はぐらかされちゃうに決まって ん？

「ねえ、ウエスター。そのリュックサック…なに？」

あんまりにもクラッと来てて気づくの遅れたけど、ウエスターはオープン出でからずーっとリュック抱

えてる。落ちないように、大事そうにさ。

「ん？ あ、いつけね。閉めっぱなしはまずいよな」

閉めっぱなし？ なにが って！

「ええええええっ!!?」

思わず、ミキさんとふたりで大声あげちゃったよ。

だつて、ちよつと、さあ！

「こ、子供じゃない!」

「なんで女の子、ふくろに入れてるのよ! ってい

つか、この子、なんなの!?!」

「勇者さま、だそつだ。サウラーがそう言っていた」

勇者??

「ああ。なんでも、カオルチャン大魔王が襲った子

供らしい。この子が倒れたおかげで、大人たちが本

気になったんだ。この子もカオルチャンに会いたい

と言つてたから連れてきたんだけど でもなんで

勇者かつて言われると、俺にはわからないな」

ウェスターの言葉を聞きながら、あたしたちはリュック

の中をのぞき込んだ。

静かな息と、ちっちゃく動くおなか 怪我もし

てないみたいだし、普通に眠ってるだけだね。

「勇者 あー!」

え？ なに、ミキたん？

「ラブ。この子、かあるちゃん大魔王専用の勇者に

なれるわ!」

よく わかんないけど、ミキたんが言つんなら。

でも、

「でも、せつなたちが行った先、わかんないよ? ど

うやって送れば」

「ふむ。黄色い嬢さんじゃがの、バッジを持つとら

んか?」

いままでじつと黙つてたドクが、いきなり口を開

いた。バッジ?

「青くて、地球の絵が書いてある、あれ?」

あ、あーあー。かあるちゃんの車の前で見た、あれ

かあ。でもそれが何なんだろう?

「おお、やはりあの嬢さんに渡しておつたか。それ

なら心配いらん、細工がしてあるからな。

そのゲートに入れば、送ってやるつ。ただし、

行けるのはせいぜいふたりじゃ」

あたしとミキたんがまっすぐウエスターの目を見たら、すぐに大きなうなずきが返ってきたよ。

リュックサックのフタを開けたまま、また大事そうにかかえて、オーブナーゲートに向かっ行って、「一応言っておくけど、ブッキーといっしょに、ブッポンに怒ったせつなもいるよ?」

「多少殴られるくらいどつってことはない。兄弟は命をかけたんだからな やってくれ、じいさん」

「じいさんじゃない、ドクと呼べ!」

ドクといっしょに、あたしとミキたんの声もウエスターを送ってった。

ウエスターが完全に消えて、オーブンが静かになったころ。ふたりのいた場所を眺めながら、あたしはドクに訊いたの。

「あの、さ、ドク。なんで やっぱりブッキーなの?」

別に欲しいと言わないけど、かおるちゃんがブッキーにだけ、っていうのが、ちょっと、ね。

「決まるとるよ。かおるちゃんの弱点は、あの嬢ちゃんじゃからな」

弱点、か うん。

「まかせたよ。ブッキー、せつな♡」

せつなちゃんがため息いっぱいじゃなくなつてから、すこし相談したの。

もうすぐ車は目的地に着いて、かおるちゃんに会えるはず。さすがにケガ人を、本当に殴るわけにはいかないし。どっちが何を言えはいいか、どう言えはいいか っ。そうしてたら、スピーカーから声が聞こえてきたの。

『しかし、光栄ですな。かおるちゃん、天敵とお近づきになれるとは』

て、天敵!?

『ああ、失礼。言い方がよくありませんな。でも、本当なんですよ。かおるちゃんが一番対応に困る相手。それがあなたです。山吹さん』

「な、なんの——?」

わたしが言おうとした口の前に、手が出てきた。せつなちゃんの、やわらかい手。

「ブッキーの口癖のことね。』わたし、信じてる』
ちがう?」

『ええ。まさに、ブキくんですよ』

目の前の手がゆっくり降りて、せつなちゃんの顔が見えるようになったら、

「魔王を倒す、聖なる武器ね。ふふふ」

すっごいいい顔で笑ってるわ。もう!

「武器だけが行ったってダメでしょ?」

そう。わたしだけ信じてても、ダメな気がするの。

かおるちゃん、するつとはぐらかしちゃう気が

『あなただけでは、足りませんか』

「うん、そんな気が え?」

その瞬間、わたしのスカートのポケットが、明るく光ったわ。なんだろうと思って中をさぐったら、

「うわあっ!」

「きゃああつっ!?!」

な、なに? いきなりわたしとせつなちゃんの間、なにかが落ちて 大きな、人、ってこれ、ウエ

スターさん!?

「あなた、まだ叩かれ足りないのっつ!?!」

「わーっつ! ちよ、ちよっと待った!」

ばちーんん

すっごい音が車じゅうに響いてから、せつなちゃんが引っぱたいんだってわかった。手の動きなんてぜんっぜん見えなかったもの。

「っつてて。いやちよっと待ってて、イースよお。」

俺はいけど、せっかくゲートでやってきたこの子までふっ飛ばされたら困るんだよ」

あ、やっぱりこれって、ドクが飛ばしてくれたんだ。でも、この子、って？

「この子？ あ、アナナス!!」

ウエスターさんが抱えていたふくろを覗きこんだせつなちゃんが、すぐくびつくりした声で言ったの。

アナナスちゃん、ってさっき聞いた、かおるちゃんが倒しちゃった ああぁっ！

わたしはすぐ、せつなちゃんに目配せした。

「揃ったわー!」

「勇者さまと、聖なる武器ー!」

そのときぎゅっ、と車が停まる感じがしたの。

『やれやれ、ドクにも困ったものですね。機密なものもあつたもんじゃ』

言葉が途切れたと思ったら、車のドアがカチャッと開いて、ひげのおじさん——大塚さんが覗きこん

でたわ。

「が、まあいいでしょう。さて皆さん、魔王の城に乗り込みますよ」

わたしとせつなちゃんは、いっしょに女の子を抱えて車を降りた。ケガとかはしてないみたい うん。

「さあ行くわよ、かおるちゃん!」

コン、コン

軽い音が響いたあと、

「はいよ。ああ、中佐。ひさしぶりだねえ」

大塚さんが開けた個室のドアの向こう側から、かおるちゃんの声が出た。いつもより、ちょっとだけ枯れちゃった声が。

「中佐じゃありませんよ。もう何度も言ってるでしょう?」

「んじゃ、カーネル・オオツカかい? あっ、ちじゃそ

う呼ばれてたそうじゃないか」

ふう、って、ドアの外まで聞こえるくらいのため息があつてから、大塚さんの声がまた静かになった。

「お久しぶりです、かおるちゃん。ICUじゃなくてほつとしましたよ」

「ははっ、悪いね、運がよくつて。それに面倒なことも任せちゃったしさ」

「任務はかまいません。ただできれば、いつまでなのかを訊かせて頂きたいのですが」

「そつだねえ　このまま、ずつとつてことはできないかなあ」

またそんなこと言ってる

「ずつと？　あの町を、離れるのですか？」

「派手にやつちやうたからねえ。ホントのところ、あつちの世界の子にはどつき倒されかねないよ。お月さまでもないのにな。ぐはっ」

ほそつ、と隣でせつなちゃんが何か言った。聞こえないけど、なんとなくわかるわ。

わたしと一緒に、ぎゅってこぶしを握っちゃってるんだもの。

「離れる、ですが。じゃあその前に、大魔王はちゃんと倒されないとけませんな。　さ、入って！」

「へっ？」

さあ、出番よ！

「大魔王かおるちゃん、覚悟！」

わたしはそう言いながら、せつなちゃんと一緒に開いたドアから飛び込んだ。

目の前のベッドには、何日かぶりのかおるちゃん。

素顔のままだったのに、ぱっ、と枕元のサンングラスかけちゃって、

「大魔王かおるちゃんは、ちゃんと倒されてるじゃない。ラビリンズでさ」

サンングラスかけてはぐらかせば、逃げられると、思ってるよね？

「ちゃんとどめを刺さなくちゃダメだよ。日本で」

でも。

「とどめ？ なに、お嬢ちゃんたちが？」

首を振ったわたしのあとを、せつなちゃんが引き取ってくれた。

「大魔王を倒すのは勇者様、って決まってるもの。

さあ、入ってきて、勇者様！」

「勇者だつてえ？ あっ！」

「まおうわ、しんじやだめなの」

せつなちゃんが思い切り手を振ったドアの先から、女の子が入ってきて言ったわ。

ウエスターさんに連れられた、さつき起きたばかりのアナナスちゃんが。

「また、どーなつつくって。ね♡」

そうしたらかおるちゃん、にっこり笑ったのよ。

「あー、こりやまいった。確かにオレ専用の勇者さまだね。おかげで、安心して行けるよ。げはっ

やっぱり。まーだ、懲りてないわ。

わたしがちらつくと隣に目をやると、その先でせつなちゃんがうなずいて親指立ててる。

やっちゃんえ！ って、声が聞こえてくるみたい。

「行きたければ、行つていいのよ。

でもかおるちゃんは、わたしたちのところに、ちゃんと帰ってくるわ。わたし、信じてる」

「ほえ？」

両手を握つてそう言ったら、かおるちゃんの顔が、ちよつとぼかん、となった。よおし、あと一步！

「ほら、アスナスちゃんも一緒に」

小さな手を握つて言つたわたしに、小さな声がしつかり応えてくれた。

「うん！」

大丈夫。この子は、わかってくれてる。それにせつなちゃんだつて、わたしの肩を支えてくれてるわ。

それじゃあ、せえ、のお せっ！

「わたし、しんじてる!!」

「あ　あは、あはははは。

確かに、勇者さまと聖なる剣だ。こりゃダメだ、もう灰になるしかないよ。はははははは」

ぐは、もげは、もいらないよ。もう、逃がさないんだから。

握ったちっちゃな手と、肩に置かれたしっかりした手が、わたしにうなずいてた。

—おしまい—